



# JLD NEWS

Japan League on Developmental Disabilities

2015  
July

NO. 100

SSKP

特集

## 共生社会の形成におけるキャリア発達支援の意義

青森県教育庁学校教育課特別支援教育推進室 指導主事

### 菊地 一文

国際障害者年(1981)を契機に「自己決定と本人参加」が世界的思潮となり、本人参加が大きく進展しました。サラマンカ宣言(1994)以降、さらにその動きは推進され、2006年の第61回国連総会において、障害者の権利に関する条約(以下、権利条約)が採択されるに至りました。我が国は翌2007年9月に権利条約に署名し、各分野の関係法令の整備を進めた後、2014年2月に140番目の締結国となり、現在、国連が求める締結から2年後の実施状況の報告に向けて、法令を反映した取組の充実が求められているところです。

本稿では、このような背景を踏まえ、我が国が目指す共生社会の形成及びインクルーシブ教育システムの構築におけるキャリア発達支援の意義について述べます。なお、本稿では、本連盟の定義と同様に、知的障害及び発達障害を発達障害と表記します。

#### 1 共生社会の形成とキャリア教育

我が国における権利条約の締結に向けた一連の流れの中で、目指すべき社会として「共生社会」が示されてきました。中央教育審議会初等中等教育分科会が報告した「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」では、共

生社会を「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献できる社会」、「誰もが相互に人格と個性を尊重し合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会」とし、共生社会の形成に向けて、すべての学校種・段階を対象とする「特別支援教育」の推進によって、一人一人の「十分な教育」を実現するための連続した多様な学びの場である「インクルーシブ教育システム」を構築することが求められるとしています。本報告を受け、文部科学省では「インクルーシブ教育システム構築事業」をはじめとする様々な事業を展開しており、各自治体においては、その活用により、特別支援教育の更なる充実を図るための体制整備を進めてきています。

上述の動きが、特別支援教育を出発点とした教育の充実を図る視点から展開されてきた一方で、ここ数年来、通常の教育を出発点とした一人一人の社会的・職業的自立を図る視点から、キャリア教育を推進し教育活動の一層の充実を図ろうとする動きがあります。キャリア教育は、若者の離職等の問題から学校教育と職業生活・社会生活をつなぐために、教育活動全体の見直しと改善を図るものとして導入されてきた経緯が

ありますが、特別支援教育においては、特殊教育の時代から一人一人の発達を支援し、自立と社会参加を目指すことが重視されてきており、このことはキャリア教育が目指すものと大きく重なると捉えることができます。

近年の特別支援教育分野におけるキャリア教育への注目と推進は、特別支援学校高等部学習指導要領に職業教育及び進路指導の充実を図る観点から「キャリア教育推進」の文言が明示されたことによるものが大きく、このことを契機に学校研究等をとおしてキャリア教育に関する組織的理解に努める特別支援学校が増えてきました。また、サラムンカ宣言以降の本人主体を重視する潮流と相俟って、取組の充実が図られてきたと言えるでしょう。具体的には、特別支援教育の本質を改めて問い直し、キャリア概念を踏まえた本人主体の授業及び教育課程の改善を図ることや、学校内完結にとどまらない、地域との連携・協働による取組の推進につながったと言えます。

共生社会の形成においては、障害のある者、障害のない者双方が違いを認め合うことが求められます。まさに障害の有無にかかわらず、児童生徒等を含むすべての人にとって「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である「キャリア発達」への支援が必要となるのです。その充実のためには、交流及び共同学習や学校内完結ではない、地域・社会との連携・協働による取組がこれまで以上に求められます。

## 2 発達障害のある児童生徒等のキャリアと地域協働活動の意義

個々人のキャリアは、生涯にわたって、様々な役割をとおして、環境との相互作用によって発達・変化するものです。とりわけ学校教育段階は「学ぶ」役割が中心となり、卒業後においては、「職業人」として「働く」役割が中心となりますが、学校教育段階は、まさに生涯に渡って発達・変化していくキャリアの土台づくりといえる時期です。児童生徒等は主に「学ぶ」ことをとおして、たくさんの影響を受けており、その結果、ポジティブにもなり、ネガティブにもなり得るのです。

発達障害のある児童生徒等の中には、自己肯定感が低く、自信や意欲がもてずにいる者も少なくありません。彼らにとっての「いま」は、過去の（おそらくネガティブな）経験の延長線上にある「いま」なのです。一方で、彼らにとっての「いま」は、これから先のよい経験によって、自分が「ありたい」「なりたい」夢を描いたり、ポジティブに取り組んだりするように変化するものでもあります。まずは、彼らができることや分かることをとおして自信がもてるよう、学習をはじめとするさまざまな物事に向き合うための「必要な支援」の充実が求められます。その先に、他者と適切にかかわろうとしたり、将来に目を向け、初めてのことや困難なことに対しても前向きに取り組んだりする姿があるのです。改めてキャリアとは「これまで」「いま」「これから」という時間軸と様々な「役割」という空間軸において、環境との相互作用によって発達・変化するものであることを押さえる必要があります。また、キャリアの中核となる「本人の願い」を大切にし、その把握と支援に努める必要があります。

森脇（2014）は、障害のある生徒の社会的・職業的自立を目指すうえで、量的なアプローチとしての産業現場等における実習（以下、現場実習）の充実と質的なアプローチとしてのキャリア発達支援の充実の二つの側面が必要であることを指摘しています。また、これらを踏まえた取組を「地域協働活動」と称し、地域において他者とともに活動することの意義について述べています。

地域協働活動では、必要とされる学校、必要とされる生徒を目指すことが協働の視点となり、生徒が地域から感謝や期待の声をかけられることをとおして「必要とされる実感」を感じ取る経験を最も大切なねらいとしています。地域の中で「必要とされる実感」は、将来の社会的自立・職業的自立に向けた本人の将来の「夢や希望」につながるものです。また、地域協働活動において、地域の中で「役割」を担うことには、「責任」が生じます。責任とは、負わされるものではなく「自ら進んで他者の求めに繰り返し応える」ことをとおして理解され、形成されるものです。相手に求められて

いること、必要とされていることを生徒自身が実感し、応えることによって自己肯定感や自尊感情の育ち、より高次の意思決定につながります。他方、受け入れる者にとっても実際に生徒とかかわり、彼らの育ちを間近に目にすることにより、障害のある者に対する理解が促されるなど、環境側のキャリアも開発されるのです。このことは、学校教育に携わる教職員が、児童生徒等への指導・支援をとおして彼らの「学び」「育ち」にかかわることによって、自らが「学び」「育つ」とも重なります。

### 3 共生社会の形成に資する障害のある者となない者双方のキャリア発達支援

今後、交流及び共同学習や現場実習など、地域の中での諸活動を進めるに当たっては、「キャリア発達支援」の視点を踏まえつつ、その先には、目指すべき「共生社会」の形成があることを念頭に置き、実践を積み重ねていくことが求められます。障害のある者となない者が場を共にすることを手段とし、それぞれにとっての教育活動上のねらいや目的を明確にするなどのWin-Winの関係を意図するとともに、「経験」は物事に対する見方や考え方、受け止め方といった、双方のキャリアに影響を与えるものであることを意識し、実践することが期待されます。そのためには、諸活動を単なる体験にとどまらず、「振り返り」と「言語化」「対話」を重視し、確かな「経験」につなげる必要があります。このことは地域協働活動のみならず校内外で行われるすべての授業等に共通するものです。

なお、最近話題となっている、探求型学習やアクティブ・ラーニングは、特別支援教育、とりわけ知的障害教育が大切にしてきた実際的な学びの方法とも重なるものであり、上述のキャリア発達支援において留意すべき事項にも通ずると捉えられます。言い換えると、探求型学習やアクティブ・ラーニングは、単なる指導方法としてだけでなく、学び手である児童生徒等のキャリア発達を促すものとして注目する必要があると考えます。また、通常の教育課程と特別の教育課程においては、各教科の内容及び構造上の違いがあります

が、目指すべき教育の目的は同一であり、学びの方法論において学習上・生活上の困難を有する児童生徒に対する教育実践の有する価値を再確認することは、今後、インクルーシブ教育システムの構築を進めていく上でも意義深く、特別支援教育分野として「育成すべき資質・能力」をはじめとする議論に注目し、整理していくことが期待されます。

特別支援教育分野における多くの実践事例が示唆するように、地域協働活動をはじめとする教育活動全般をキャリア発達支援の視点から捉え直すことは、生徒の自己肯定感や意欲の高まりにつながる重要な機会となると同時に、受け入れる企業をはじめとする地域やかかわる者自身にとっても貴重な気づきや変化を促す契機となります。改めてこれまでの実践や研究知見の価値を捉え直し、現代的意味を確認していくことが求められるでしょう。

障害の有無や場や年齢などの違いは「障壁」と捉えられがちですが、むしろ双方の価値を認め合い、融合することにより、新たなものを生み出すチャンスとなり得ます。生徒の変化をていねいに捉え直すと同時に環境側の変化にも目を向け、キャリア発達の相互性や同時平行性を再確認するとともに、効果的な実践の在り方について検討し充実を図ることが、目指すべき共生社会の形成に資すると考えます。

#### 【文献】

菊地一文(2014) 特別支援教育分野におけるキャリア発達を支援する教育の意義. キャリア発達支援研究1. キャリア教育研究会編.

ジアース教育新社.

森脇勤(2014) 地域協働の中でキャリア発達を促す意味. キャリア発達支援研究1. キャリア教育研究会編.

ジアース教育新社.